

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和4(2022)年
4月号
通巻620号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和4年4月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷製本
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



奈良公園、飛火野と御蓋山・春日山

井手泉さん遺作のパステル画(文・4頁と8頁)

昭和42(1967)年4月23日 月次祭法話より

神ながらの宗教～自然の流れに沿う～

法主 矢追日聖 (満55歳)

大きな気の流れと宇宙

今年は三月の暮れから雨が多くて、四月初めの花見時にもさっぱりだったという年になりました。そこにもってきて南海電車の無人踏切の重大事故をはじめとして同じような事故があちらこちらに起こっておりまして。新聞なんか見えますと連鎖反応という言葉を使っています。とにかく自然現象でも常に、人間の心と自然の気との一致した何かの形において具体的に現れてくるんです。

その気というものと、人間の思いや心は一つの力をもって動いているんです。ちようど放送局で電波を世間に送っておるようなもので、それに引つかかった者が、その気のような現象を出してくるんです。天候も悪つごさいしましたけれども、何かしら大きな交通事故が頻々として出てくる。

皆、そういう事故は再びあつてはならない、何とかしなくてはいけないと、口では言ってますが、悪想念が満ちておるということです。世の中にその時や時代の流れが、一つひとつの現象として顕れてくるんです。

三月の暮れから四月にかけての心の世界、霊の世界の動きというのは分りにくいもの、どうもあまりよろしくくない。これは大きな動きにも、各家庭の小さい動きの中にも同時にしやすい時期であったと思うんです。

しかし今日は久しぶりだからりと晴れ

まして空気も爽やかで、桜の花は葉になって風も吹いております。今はつつじと八重桜が満開でございいますが、これで何かしら気分が一変したような感じがいたします。

そういうような気の動きというものは、宇宙が出来た、地球が出来たという最初の時から元々あるんですね。私たち人間がそれを見てどうだこうだと、ただ解釈しているだけのことです。

人類がまだ地球に発生する前から現在に至るまで、何ひとつ変わらない宇宙の力というものが働いております。後から生まれたきた人類が、宗教とかあるいは科学知識によってあれやこれやと説明をしておるだけであって、実存しておった全てものは、何ひとつ変化はございません。

元々人間が作ったというものは何にもない。人間が地球上に生存し得るための全ての自然条件が出来上がったはじめて、私たちが生まれ、地球上に生育し、住まいさせてもらっているんです。それは大倭でいつも神ながらと申します、ひとつの大きな流れの中なんです。

神ながらの流れの中で

神ながらの流れにおいて私たちが生まれてきた時に、私たちの肉体という物質も、また肉体を支配しておる心、いわゆる靈魂も元々はこの大宇宙の中にすでに在ったものなんです。人間が生まれてくるために俄かに靈魂をつくったり、一人ひとりに生命力を与えたという、そんなものじゃないんです。初めからもう在ったんです。

お互いに我々は、どうすれば幸せになるかとか不幸になるかとか考えますよね。けれど元々宇宙の心が地球を生み出し、その地球の上にいるんな動物や植物が生まれておるわけで、皆が幸せにい

くようにというのが宇宙の心、自然の大きな心なんです。神の心と言葉を言い換えてもいい。そのことを私たちは一番知らなければならぬ。

そこで勝手にですね、不幸になるような生き方をしておるのが現在の人類の姿だと思ふ。それ自体が自然の心に反しているんです。

元々は自然の心と人間の心が一緒にさえやっつていけば、修養とか宗教とかこんなくだらんものも必要ないんです。だけれども自分でつけた垢をお互いに持っておるがために、それをぬぐい取る方法が、今の世界中にある宗教ということになります。

先程も歌っておった「黎明大倭」の聖歌の中でも「祖神の詔かしこみて、使命に殉ぜん比登のため」というような言葉があります。祖神の詔というのは今言いました大宇宙の心、地球の心、自然の心です。

祖神の詔をかしこむということは、祖神は何をせいとおっしゃっているかをよく心に入れるということなんです。我々がこの地上に生まれた以上、人類がお互いに皆仲良くいくように、そして喜んで一生を送るようというのが、祖神の心なんです。祖神のそうした心を私たちが自分たちの心にしなれば、世の中はどうしたって平和にはならないと思うんです。

人それぞれを活かす

また人間というのは個人差がある。その人なりの持ち前があるんです。その持ち前が命、いわゆる使命、お役目なんです。お互いに自分たちに持ってきた命というものを自分で活かす、それが命を果たす、使命に殉ずるといふことなんです。

ところが、この世に生まれてきた自分の命を自分で分かればいいのですが、これはもう分からない

人が九分九厘なんです。それが分かれば自分の命と共に死んでいくことが、比登のためになるんだというのが聖歌の歌詞なんです。

比登は普通に漢字使いますと人ですけれども、人のためということは、常識から言うとう自分を除いた他人さんのためだと解釈する場合が多いと思うんです。これは決してそうじゃない、自分も含んでいるんです。

「人」は音で読めば「じん」ですが、大和言葉では「ひと」と読むんです(※聖歌は万葉仮名で比登として区別している)。「ひと」というのは、「ひふみよいむなやこと」であって、一から十まで具備しておるといふことです。

日本の国はね、大体、書いて残す文字の国じゃないんですね。言霊でもって咲いていく国、言霊の幸う国ですね。言葉の国なんです。支那(※以降、中国)は文字の国ですけれども、日本の古代というのは、言葉の国なんです。

大和言葉の中にはいろんな深い意味が含まれているんですが、漢字を使って書くがために本当の意味がなくなってくる。今の一から十までも神さんからもらって備えておる者を「ひと」と言った。中国の「人(じん)」という字をもってくれば、「ひふみよいむなやこと」の内容がなくなってしまう。

よく「人」という文字については、人間のお互い持ちつ持たれつという程度で説明されますけど、これは中国人の説明ですからね。日本人的な説明ではないんです。

要するにあの聖歌は、自分も他人も、世の中の皆のため、人類のため、お互いに持つておる使命に殉じていこうという意味なんです。それが日本人の神ながらの生き方なんです。

もし、何か自分だけが殉じて犠牲になって他人

さんのためにやるんやというように解釈される方があれば、これは大間違いですから、その点だけを訂正しておきたいと思うんです。

それならば、じゃあどうすれば私たちがお互いに仲良くいけるかと、これは知識でもってどれだけ考えてもできないんです。

天の気と共にある日常

人類発生して以来こんにちまで、文化国家とか社会の文化が、段々高くなるにしたがって人間と人間との争いが激しくなってきたております。これはもう逆なんです。ということは、自然の心を、人類が切り離して遠ざかっていくからだと思いません。

そういう面において、私がよく日本の古代のことを口にしますけども、古代社会というのは自然と人間の心が非常に密接だったと思うんですね。日本は幸いにして農耕の文化から出発しておりますから、やっぱり百姓しようとするは、稲作にしても野菜もの作るにしても、機械でもって仕事するようなわけにはいけません。常に自然を対象としてやらなければならぬから、古代の人はものすごく自然との親しみが深かったんです。

そういうような日本人にはひとつの伝統的なものがあるわけです。今の世になっても、私たちがお互いに朝初めてばつと会った時に、これは田舎だけかもしれないが、必ず天候のことから挨拶が始まる。「ああ、今日はいいお天気ですな」とか、「ああ、今日は雨ですな」とか、そんなあんなこと言わなくても誰でも分かるところです。けれども、そういうような会話が心の潤いになるんです。現実には目の前にあることを話し合う。これは私たちの伝統的に持つてきた精神生活の面

であって、常に天の気のことか気がかかるというのが日本人だと思えます。

ところが長い何千年かの歴史の中において、仮に生活苦とか経済的に苦痛を感じて、その日その日喰うてさえいけたら結構だというような国であれば、お互いに朝でも会った時に「もう食事はすみましたか」というのが挨拶になるかもしれない。あるいはもう寝ても起きても金儲け金儲けと餓鬼になって働いておる人であればですよ、顔見たら「儲かりましたか、損しましたか」というのが挨拶やと思えます。

日本の古代社会は農耕の文化から来ておりますから、天気と、いわゆる神さんの心というものを常に結び合わせてね、その天候が挨拶になったと思えます。「今日はお天気ですな。天の気がよろしい」とか、また「今日は荒れますな。どうも天の気が悪い」という時は、我々人間も気をつけないといかんというように考えます。

今の時代にそんなこと言うたってね、おかしいでしょうが、できるだけ自然の心と人間の心が近づくと、私はね、それが非常に結構だと思えます。大倭の宗教はそれですね、できるだけ自然に近づいていこうと。自然は元々からあるんですから、人間の方が自然に近づいていくという方法が一番いいと思えます。

無統制の統制の中にある

そこで、私たち人間は無統制の中に統制されておるんですね。私はいつも無統制の統制という言葉を使って言うたり新聞にも書いていますけれども、何のことか、これまあ分からんと思えます。

蜂の世界ひとつ見ても、いろんな種類の蜂がありますけども、蜜蜂の生態を見た場合にこれも無

統制の統制だと思えます。蜂自身は別に何も相談しないでしょうが、どこの蜜蜂の巣を見ても同じ形にできている。同じように集団生活しておる。その中でいろいろ動いている。働きに行くもの、家を守るもの、卵産みつけるものと、職分別ができています。誰がしたのか、ちゃんと統制している。こういうのを見た時でも私はね、神秘を感じるんです。宇宙の心とかあるいは自然の知恵とかね、そんなものを感じるんです。

あるいはまた鳥の世界を見ても、雁が竿になつて飛んで行く時、どういような種類の雁が一番先頭になるのか、あるいは二番目三番目四番目となるのか。どういようなところからあいう形を教えたのか。おそらく雁自身は修養したり、我々人間のように話し合ったりしないと思えます。ところがちゃんと序列を決めてうまい具合に飛んで行く。

誰がそれを統制しているのか。何故そうなるのか。そんなのがね、自然の心というのは、我々人間の知識以外のところにあると思えます。

我々人類にもそういうようなひとつの働きというものが、蜂とか鳥以上にあるべきなんです。一から十のものを備えている人間が、蜜蜂の世界のように仲良くいられないというのはですよ、何かそこに欠けておるものがあるからなんです、我々人間もできるだけ自然の心に近づいていきたいというのが私の願いです。

けど私自身の死ぬ時でも、おそらく一人前の人へひとにはなれない、何か欠けておることでしょうが、できるだけ神がおっしゃる、自然の言うところの人、一から十までを具備した人間になりたい。より人へひとになりたい。

私もまだ修行中ですから偉そうなこと言えませんが、まあこの紫陽花にも、まだまだ未熟

者ばかりが集まっています。もしこれがね、できておる人間であれば、別に私のそばにいらなくていいわけです。

仮に我々皆が完成した人間になれば、つまらんとするんです。やっぱりね、半足者(11半人前)や未熟者が集まっているから、宗教の必要性もありお互いに修養する必要も出てくる。一から十を全部具備しておる完全な人になれば、これはもう神さん、自然の大神さんということです。だからそんなことあり得ない。まあまあ、お互いに六七、そのくらいでええとこでしょう。

こうして大倭へ皆さんが集まりになるということも、期するところは、今言うように自然の心と一緒になれとか、自然に近づいたらいいとかいうことです。しかし我々は社会の中で苦の世界のような現実生活の中で生きていますから、こんな抽象論ではね、何にも分からんかもしれません。それでも自分でそういうような心持ちになろうとね、努めることが必要だと思います。

前にも言いましたように、家族の中だけでも仲良くいくということ、これは自然の心なんです。

予期しないものが形になる

最近、大倭会館の問題についてちよつと私が感じたことですが、寄付の問題です。心のあるものは受けてもよろしいけども、心のないものは受けはいいけないと。

例えばひとつの物を建てようとか計画した場合に、もうすでに心の世界、幽の世界では出来上がっているんです。

ただ時間の問題なんです。こんなもん百年かかってかまわない。それをたつた一年、二年でしようという焦りが出てくるから、物事とし

て大層になる。無理をしなきゃいけないということになるんです。人間というのはとらわれがあるんですね。

出来る旬がくれば出来る。桜見たい見たいと、冬の最中にその木をなんぼゆすつたかてね、やっぱり四月にならなきゃ咲かない。世の中にはそういうような人間以外の何かの動きがあるんです。ひとつの道はつける、目標は定めるけれども、歩むのは一步一步という、自然の行き方がいいと思わんです。

これが大倭会館の場合でも、大倭教に寄付をするとか大倭の神さんに寄付するとかね、また法主さんに世話になつてから寄付するとか、そんな寄付やったら一切やめて欲しい。

私は最初から言うように、今度の建物は人間が主体であつて、自分たちがお互いに金を出し合つて、作った物を自分たちが使う、またそれ以外の人も使う。そういうような性格を持った建物です。役員さんたちもその点だけは、はじめをはつきりとしておいて欲しいと思います。

出してくれるのはなんぼでもいい、志なんですけども、心のない寄付というものは、これは大倭の流れとしてあまり好ましくないんです。例えば、あの人が来たら付き合いで出さなしようないなとか。

私はノータッチですから役員会にくちばし入れませんけども、この間の役員会の時、聞いておればそういうような雰囲気があります。ひとつのものにこだわってね、これは無理してもこうせないかんという決めつけ、とらわれはもう神ながらでは最もまずい方法なんです。

どんな広大な計画も大きな道も、これは必要なんです。結局は心の目標ですからいいんですけども、具体的に現界において形を出す場合には、いわゆる大倭の流れ、霊の世界と人間の心が一致し

て動くところに我々の予期せんものが出来てくると思うんです。今日はこの辺にしときます。(文責・編集部)

訃報 井手泉さんが帰幽されました



長年にわたり大倭や大倭安宿苑にご縁の深かった井手泉さんが、去る3月13日午前6時20分に帰幽されました。昭和5年

に長崎県で生まれ、満92歳の長命でした。法名は神倭誠感伊津美比古命。

奈良市菅原町のベルコシティホールで、教長・矢追家麻呂さんを祭主、喪主を姪の中野明美さんとして、3月17日午後7時から前夜祭、18日午前11時から帰幽祭が執り行われました。

井手さんが大倭と出会ったのは昭和53年のことだ、一法主さんが私の思いや悩みを夜を徹して一言ももらさずに聞いてくれ、生まれ変わったような心境になった」と語ってくれたのを思い出します。その後、一家で紫陽花邑に移り住み大倭安宿苑に就職し、経理や事務の仕事に従事されました。井手さんの写真の腕前は、長崎で写真館を営んでいた父親の井手傳次郎氏譲りで、野生の生きものや風景などのシャープな写真を本紙の表紙に数多く提供していただきました。

野生の生きものに対する井手さんの関心と愛情の深さは並はずれたものがありました。特にへび、カエル、カメなどの爬虫類や両生類の生態観察のきめ細かいデータは専門家からも注目されており、近年は奈良吉野の川上村の原生林で自然観察に打ち込んでいました。自然の中にカミを見る井手さんの眼力は確かなものでした。(編集部T)

令和4年1月9日 大倭会主催禊会より 宗教的に向上をはかっていくような場に(1)

拜殿にて、午後2〜5時

近況など

林修三 一応、私が司会をさせて頂くということ
で。最初に聖歌一番、最後に聖歌五番を歌います。
以前、間違えて最後にも聖歌一番を歌ったことが
あるんですね。誰も最後まで気がつかなかったと
いう程度なので、まあ気楽にして下さい。(笑)

— 聖歌一番、奈母太加天腹、柏手 —

林 令和2年5月の第616回以降、コロナのた
めに2年弱中止していた禊会を再開しようとい
うことになりました。過去の禊会の形にとられず
新しい形を作ろうという考えがあるのですが、今
日のところは初めての方も来ておられるし、自己
紹介とか最近思っていることなどを語ってもらえ
たらなと思います。

一つ提案があるんです。この中止の間に、禊会
のレギュラーだった杉浩史さんが亡くなりました
(令和2年11月14日)。ちよつとだけ気持を向け
たいと思って、杉さんを思い出すというより、今
もここにおられるつもりで話を進めて頂いたらど
うでしょうか。

杉本順一 テレビなんかを見ていると、有名な人
が亡くなると、送る側の人「安らかにお眠り下
さい」と決まったパターンみたいに言うてはるや
ろ。それを皆不思議にも思わんと、ごもつともみ
たいな顔して聞いてますよね。

ちよつと待てよと……。もう死んだ人の肉体に
対してお眠り下さいってどういふことや。ボクに
したら、死んだ人はその瞬間からそばにおるの

分かるんや。まあ「安らかに」まではええねん、靈
界でも現界でも安らかな心境は大事やろと思う。
お眠り下さいと言ふのは、黙って寝ておけ、何も
言うなということになるでしょ。

靈界ってそんな静かな黙ってはる人ばかりやな
いんですよ。山ほど言いたいことがあると感じて
しまうから、お眠り下さいと言ふのは、死んだ人
を失礼というか、もう1回殺すんかという気にな
るな。杉に、「安らかにお眠り下さい」とはよう
言わんなあ。まあ思ったことは正々堂々と言うし、
自分自身を偽らずに生き抜いた生きざまやった。
死んだかて、そうやろと思う。法主さんはな、
杉はきちんと生きよつたぞ」と、ボクに言わは
ってん。法主さんにそう言われるなんて最高やで。

(※平成2年2月号『とおやまと』追悼文参照)

亡くなる少し前に、中島健さんが見舞いに行つ
てくれた時、「オレはボンにあやまらなあかんね
ん」と言うたそうや。何やそれと思つたら、一緒
にやろうと大倭に入門したけど、途中で自分は出
てしまったということを言うてたらしい。杉は杉
で自分の生きる道を見つけたわけだし、ボクは残
ったけどボクに遠慮する必要もないことや。けど、
どこかでそんな風に思っていたんやな。

岸田哲 禊会は昔、法主さんも居られて、夜中に
やっていた頃にいつも参加していたという記憶が
ありますが、最近ほとんど来ていなくて本当に
久しぶりです。

ごく最近、義父を見送りました。パーキンソン
病を長年患っていて、最後の頃は体調がすぐれな
くて短期間入院していました。でもご自分から

「家に帰りたい」と言うので、家族が受け入れ態
勢を準備して帰ってきたんですね。家に着いたら
ホツとした顔をされてベッドで眠られたのです
が、しばらくすると急に呼吸が荒くなったので、
家族の人たちが周りを囲んで見守りました。その
時かけつけて来たボクの娘が「ジイジー」と声を
かけると、パツと目を開けて数秒間娘の顔を見つ
めると、ゆっくりと目を閉じて、その後すぐに呼
吸が停止しました。

その時の雰囲気は、周りの人たちも義父が死ん
だというより、まだそこにしっかりと存在してい
るといふ実感を持っていたように思われました。
ボク自身も悲しいというより、義父がこの世での
務めを終えて次の人生に向かってゆっくりと渡っ
ていくのを見送るといった感覚の方が強かったよ
うに思います。こういう亡くなり方はうらやまし
いとさえ思いました。

高橋良美 (見田) 暎子さんと一緒に、法主さん
の晩年にお仕えさせてもらった後も案外長く大倭
にご縁が続きました。それも一区切りにして、日
本の国内をあちこち旅することを始めてまもなく、
暎子さんが病気で……。暎子さんとは、旅の
後はまた大倭に戻って大倭神宮のお掃除でもして
暮らそうという話はしていたんですが。亡くなつ
た後は、私は郷里の福島の高齢で一人暮らしの姉
のところへ行くことにして、大祭の時などには大
倭に来ていました。

で、明日は福島に出発するという日に、拜殿の
前のサルスベリの剪定を毎年やっていたので、今
年もやっておこうとしたんですね。それで梯子か
ら落ちた。その時、気絶してしまい全然記憶がな
い。やつとこのことで教務本庁まで這って行って、
救急車で入院させてもらったわけです。

肋骨から腰まで何力所も骨折があるような大怪

我で3カ月ぐらい入院して、退院してもしばらく大倭で静養したり映子さんの追悼文集作りとか、コロナで旅行がしにくいとかもあって、結局もう1年以上になります。

その間に、姉もまだ元気であるし、このまま当分大倭に居ようかという気持ちになって、教長さんよろしくとお願したところだ。

岸野春子 ワークキャンプに参加した縁で、大倭で50年以上です。初め大倭に居候しながら大阪の聾学校に通勤して、それから大倭安宿苑や大倭印刷で仕事して、退職後の今も『とおやまと』の編集があるので大倭に来てます。近所の人には「毎日、行く所があつていいね」と言われてます。

一つには、法話をCDから『とおやまと』掲載用にとめるための、何人かの皆さんとの共同作業があります。3月号の法話も推敲中なんですが、法主さんが、まああつさり「この世の中は全て向上していくように宇宙は仕組まれている。天地自然は我々が望まなくても要求しなくても何かしら与えてくれることになっている」と話しておられる。いつも言うてはったのかもしれないが、私は今回、とても心にとまりました。今の時代、暗い事件ばかりですが、やがてはいつか変化する過渡的な姿なのかなあと、救いを感じました。

私は霊界のことは分かりません。法主さんに、死んだら私にも分かりますかと尋ねたことがあるんですけど、霊界の研究は死んでからにしようと思ってます。

福田きよ子 午前中の大とんどで、落ち葉の入ったポリ袋の口がしっかりと結んであると、それを解くのに意外と手間がかかるのです。それが気になって、前もって全部ほどいておこうと少し早く来ました。それ以前は落ち葉もポリ袋ごと放り込んでましたが、袋から出して燃やすようにして、空

になった袋はまた使ってくれるやろとたたんで整理しておいたんです。

午後はまた禊会で、去年と同じようなことが今年も出来るってありがたいなあと思えます。まあ背中からストローが気持良いし居眠りが出るかも知れませんが。

初めての参加

浅井克明 私は、令和元年5月に東京から奈良に引っ越して来ました。その時から、時々大倭に遊びに来させてもらっております。

奈良に来たのは、桜井市におられる川口由一さんの無農薬・無肥料でお米とか野菜を栽培する自然農のやり方を学ばせてくれる場があるからなんです。昔、大倭会の文化行事で見学したこともあるようですね。その実習日が毎月第2日曜日で、禊会と重なっているので禊会には一度も参加していません。ところがこの1月は実習はなくて新年会という集まりがあるだけなので、それには一昨年も昨年も顔を出してるし、今年はどういかなと思っていたタイミグで禊会が再開することなので、遊びに来いということかなと今日は禊会に参加したわけです。あ、話が長くなる方なので気をつけます。

林 かまわんですよ。(笑)

浅井 少しずつ、昔の『とおやまと』を読んでいるのですが、先月の月次祭の時にもらって帰ったのは、たまたま禊会の話し合いが何回か連載されている号だったんですね。(※平成12年9月号、平成13年4月号「法主様を囲んで みそぎ、禊会を考える」昭和50年7月1日録音)

皆さんが思い思いに語られているのを、ちらちら読ませてもらって感じたのは、何故、自分が大

倭に来るのか自分でも不思議なんですけど、別に何か期待するわけでもないし、ふわーっと来ているだけ。結局、居心地がいいのかなということなんです。法主さんもふわーっとしているのが一番いいと言っておられますし。

自分は霊界のことは分からないんですが、実は母親はそういう系統の家だったりして、バックボーンとしてわりとそういう話があります。ここでは、そんなこと当たり前だと言われていたりするし、それで居心地がいいのかなとも思うのですが、まあその話はおくとして……。またよろしくお願いたします。

林 え、そんな短くていいんですか。(笑)

山田照久 禊会には初めての参加です。今月号の「寸紗」で私のことを取り上げて頂きましたので、またお読み下さったら重なることもあるかもしれません。大倭には一昨年の夏ぐらいから来て、お参りしたりお話を聞いたりさしてもらってます。元々、子供の頃から見えたり聞こえたりという不思議な体験がありまして、大きくなるにつれて細かくは見えないのですが、人が亡くなった時でも、すぐ居なくなったりはしなくて近くで居てはるなあと強く感じることはあります。亡くなって助けを求めて来てたりするのが分かるというか、どうもおかしいなという不思議な瞬間があります。

それが誰かと特定が難しい。自分の先祖さんかもしれないと色々調べたりして、結局この人かなと分かって、生前の交流がそれほどあったわけではなく冠婚葬祭で会った時にちよっと話したりする程度だったんですが、自分なりに供養してもらわなあかんかなあと思う場合が出てきます。

身内でも社会的な地位とか高い人もいて自分とは全く違うんですけど、それ以外の部分でおそ

しいほど自分に近い部分を持った人ばかり集まったりしている。また家族関係で苦労している親族のご先祖を調べていくと、実は我が家とも過去・現在、霊界共に密接に関連しあいながら現在も周りに広がっている。自分の周りが何か仕組みされているように連なっているのが見えるんです。

やっぱりこれは華厳経で説かれるように、偶然ではない、全てが密接に、過去世とか前世が複雑に絡み合いながら構築されて、自分の分からない世界も何か関連しているんやろなど最近、怖いぐらいに感じています。

その供養というのを実際どうしたらいいのか分からない。自分が清まることによって周りも清まってくる。自分の心を清めるのが大事なかなあと言うのは易しいのですが、なかなか実行が難しい。また今後ともよろしくお願いします。

死んで終わりではない

加納暉韜 綾部にお住まいの出口三平さんから誘いを受けたのをきっかけに、こちらにお邪魔させてもらうようになりました。回数はそれほど多くありません。残念なのは法主さんと面識がなく息遣いを知らないことです。法主さんと皆さんとのやりとりの話を、いつもうらやましく聞いております。法主さんのことは、皆さんの話や書籍、写真に頼って、その人柄を描いておりますが、活動内容、粗末な身なりでの野良姿やヨンポ口小屋のようなお住まいなどなど、この方は聖人だっと思わずにはおれません。法主さんの法灯が失せることなく大倭が栄えることを願っております。杉さんが亡くなられたのはこたえました。数えるほどしかお会いしていないのに。何故こんなにこたえるのかを自問自答したくらいです。共に働

く仲間を失ったような。杉さんとは家内も面識がありましたので、家内に聞いてみると、「とてもさびしい」とのこと。今日、この場に杉さんもいるからと林さんが座布団を敷いて杉さんの席をもうけられたことを、ことのほか、うれしく思っています。

これから、またコロナの波が来ると次は、いつになるかしのれない。この度のチャンスを逃したらいかんという意気込みで参加させて頂きました。皆さんの話を楽しみにしています。いろいろと聞かせて下さい。

林 25年間、非常勤ですが大学で中国語を教えていました。定年ということ、いよいよ来週で最後の授業になります。

大学に行き始めた頃、授業中時たま、大倭の話ではないけれど、まあ「霊界ばなし」みたいなのを学生にしてたんです。皆けっこ真剣に聞いてくれるんですよ。それもあまりしなくなりましたが、こここのところ対面授業が少なかつたし最後だから、君たちとは50歳ぐらい違う人生の先輩として、授業とは関係ないけどちょっと聞いてほしいと、三つのことを話したんです。

まず一つは、ボクは小さい時から、教えとか本とかじゃなく感覚として、この世だけではないといつも感じてた、と。それを探して色々なところに行っただけけど、結論として死んだら終わりじゃないよ、と。それはボクの場合だから、信じない信じて別として聞いておいてほしい、と。

自分に肉体とまた肉体の中に心があるように、世界にも見える世界と見えない世界がある、言い替えると現界と霊界がある。だから今、死んでも終わりじゃない。日本でも昔は「隠り世」とか言っただけで、感覚があったけれども、今はなくなっただけです。

それから次は、寝ている間も心臓を動かしてくれる、朝起きたら太陽が昇ってくるし四季が巡ってくる、これを司っている力を何と呼んでもいいんだけど、まあ神と言っしかないような自然神、宇宙のエネルギーがあることは間違いない。だからそれを感じてほしい。遠くにあるんじゃない、自分の心の中にも、そういう存在がある。例えば良心のように。他の人に頼ってたまされたりこづきまわされたりした結果じゃなく、自分自身の心の中に存在していることを感じてほしい。ボクもやっとならなってきたんです。

最後にもう一つ、生まれてきたことはものすごく奇跡的なことだと皆忘れないでほしい。霊界にも現界に来たい人がまだまだ一杯いるのに、選ばれてやっとならなってきたんだから無駄に死んでほしくないという話をしたんです。

そうしたら、いつもならこんな話をすると中には下を向いたりする学生もあるのに、みんな顔をこっちに向けて真剣に聞いてくれるんです。だから、今の子どもにはかまわず見て、友達ともあまり話さないし、昔とは違う感覚だけれども、人間としてはいつの時代も一緒で、どこかで心とか霊とか考えていると確信しました。やっぱり話してもいいんだなと。

死んだらそれでも終わりのような世間で、現界だけでなく霊界があって、それが交流してやっとならなっている教えが、皆の心の中に普通に宿ってくるように広めていかないといけないんじゃないか。やはり「おおよまと」は「おおよまと」として、中心になる場所じゃないかと思えます。

これで一巡しましたね。

この後は、どなたからでもどんな話でも自由にして下さい。(つづく)

あじさい日誌

3月12日 午後2時から沖繩県宮古島の齊藤俊子さん、奈良県桜井市の佐久間裕樹さんが来邑され、杉本順一・高橋良美さんと教務本庁で歓談の後、大倭神宮に参拝されました。

3月13日 井手泉さんが帰幽されました。詳しくは4頁の訃報をお読み下さい。

3月15日 大倭神宮月次祭。
3月23日 大倭大本宮月次祭。

この日は昭和42年3月23日の月次祭法話をお聞きしました。

(この日発行の本紙に「お彼岸にちなんで向上する努力を」として掲載されたものです)

4月2日 午後、群馬県安中市の櫻井保・節子夫妻と、娘で前橋市の内田誓子一家が来邑されて大倭会館で一泊。杉本順一さんが応接しました。誓子さんの夫・伸彦さんと息子・崇法さんとは初顔合わせとのこと。

4月5日 大倭会館の真向法サークルのメンバー5人が、大和郡山市「らんまん」の松下広実作品展に行きました。

4月6日 大倭神宮月次祭。

この日は金澤秀朗さん(大阪府河内長野市)の案内で、池田茂さん(同箕面市)と辻松大輔さん(滋賀県大津市)が初めて参拝されました。この後、紫陽花邑に来られ、林修三さんが法

主奥津城や瑞光院、齋庭を案内、教務本庁で杉本順一さんも同席して懇談。勉強仲間であらうしやるそうで、ネット等で法主さんの書かれたものをよく読んでおられる様子でした。

夜、大倭会館で邑倭の会。邑内の連絡のため毎月行われています。

大倭安宿苑では

4月1日 新卒採用者2名含む4名の職員に理事長より辞令交付が行われました。

(菅原園)

3月26日 久しぶりの移動美容で、伸びていた髪をカット。

4月4日 しばらく施設内で籠りきりだったが、朝からペラングで数名のお花見会。外の風を感じながら昼食を摂りました。

(須加宮寮)

3月10日 防災避難訓練。コロナ禍の対応で各居室前に待機してもらいました。

(長曾根寮)

3月12日 (デイ) 作品作りは、梅の花の造花でした。

4月4日 (特養) 外気浴で満開の桜の鑑賞をしました。

(茂毛諸園)

4月1日 創立14周年記念日。昼食の創作料理や紅白饅頭のおやつでお祝いました。

(八重垣園)

3月10日 コロナワクチンの3回目接種を行いました。特に大きな体調不良なく…。

井手泉さんを偲んで

▼奈良市 庄野久子

井手さんは職場関係の女性たちとハイキングを始めていた。私は友人の上岡美恵さんに付いて行き仲間入りした。井手さんは京都は旧知なのでと棧敷ヶ岳、花背、比良山、宇治等を案内してくれた。この集まりはハプニングが多く、ひやひやの後は大笑いした。

春日山、天川村、高野山等、奈良の一番は、十一月下旬、長谷寺駅から化粧坂を歩いて口倉の高龍神社に着いた時だ。境内一面は大木から散り積もったイチヨウの葉っぱで地面が見えなかった。井手さんは拝みながら「高龍神社の神様は龍神さんで、僕の神さんです」と話した。何十年経っても、井手さんに繋がる場面になっている。

ハイキングが途切れてからも、時折、井手さんがカエルを探したり、へびを放しに行く時に、運転手にと声をかけてもらった。いつも話は尽きなかった。後年、体を悪くされてからは特に、「すきさん、かなながらです」とおっしゃった。自分では気づけていない私を見てもらっていたのだと思っている。

久しく会えないでいた井手さんの死顔は本当に美しかった。葬儀の朝は雨。

▼兵庫県明石市 水島照美
拜啓 白ひげ眼鏡のへび学者井手様

いかがお過ごしですか。先日のお別れ会で、「へびの歌」を歌ったらむくむく元気が湧いてきました。井手さんのおかげです。

井手さんとの出会いがあったて、私の人生は思いがけない豊かなものになりました。蛇を可愛いと思うには至りませんが、嫌いとは思わなくなりました。

一緒に山へ行く時も、歌を聴いてくださる時も、電話でおしやべりする時も、いつも紳士な態度で私のことを大切に扱ってくださる井手さんとの時間は、おとぎ話の世界に入ってしまったように小さいお姫様になったようで幸せでした。

私が落ち込んでいる時、大自然の美しさや面白さを収めた写真をたくさん送ってください、どれだけ励まして頂いたことでしょうか。私の宝物です。

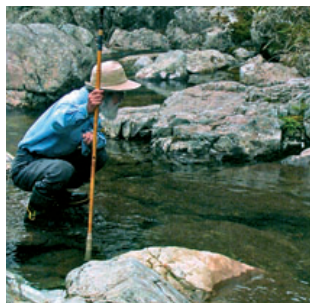
写真を撮る時の井手さんも大好きです。そういえば…。人間には興味がないっておっしゃってましたね。人間は撮りませんでした。確か、でも、私…。たくさん井手さんに写真を撮っていたかったです。

私はこれからもまだまだ歌の旅を続けます。色々なところで沢山の方に、「へびの歌」を歌って井手さんのことを話します

よ。毒蛇に噛まれた話も添えて。井手さんも聴きにきてください。ね。また遊びましょう。大好きです。

▼紀伊半島野生動物研究会 丸山健一郎

井手さんには自然観察の楽しさをたくさん教えていただきました。本当にありがとうございました。(写真は2005年5月14日、大台ヶ原のカエル調査中の井手さん)



あんない

*月次祭(大倭神宮)

5月6日(金) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催祝会

5月8日(日) 中止とします。

*月次祭(大倭神宮)

5月15日(日) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大本宮)

5月23日(月) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。